

2001 年初演時情報

<http://bunkaza.com/play/urizun/200101.html>

— P R —

□ 目 次 □-----

◆健康情報（老人のめまいは至急脳外科へ！）

<読者の声>北原さんから、すずき産地さんから、丹羽さんから、紀平さんから、丹羽さんから、類農園さんから、田村さんから、レモングラスさんから、鈴木さんから、安澤さんから、森さんから、

<舌耕のネタ> 「ニッポンの食料輸入とその危険性」

<農工大日中友好会情報> 中国研究会（畜産・酪農）のお知らせ

<丹羽敏明の戦争体験> 10、コックリさん占い

<日本たまご事情> 食の安全性に無関心？ 愛鶏園・斎藤富士雄

<森 清の読后感> 「女性と仕事3、人を愛し、仕事をするということ」

宮城まり子『淳之介さんのこと』文春文庫、2003年4月刊、638円+税

<104歳近藤康男エッセー>有馬頼寧（ありま よりやす）さんの思い出

<農文協図書館サイト更新情報>

<私の近況報告>5月15日～27日（104歳のエッセイが出来た）

<読者の声>（お断り：最近視力が極端に落ちました。そのため従来メールがきたらすぐ返信していましたが、それが出来なくなりました。今後メルマガ『電子耕』だけで返信・コメントいたしますので、ご承知ください）

<読者の声>

●5/14 北原さんから：ホームページ開設しました。

原田様

いつもメールマガジン楽しく拝見しています。特に1月9日号の”戦争を語り継ぐ”は深い感銘を受けました。私は田舎の国民学校6年生で終戦を向かえましたので、あまり辛い思いはありませんが、先輩のこうした今となっては非常に貴重な経験は、後世の人に伝えることが、とても大切なことと感じています。

また先日5月1日号には、高原さんから勝俣さんの本出版の紹介がありました。二人は私の一年先輩ですが、その頑張りに感心し、早速送付をお願いします

した。

私もインターネットを始めて1年、この度ホームページを設けました。未だ稚拙なものです。今後、四季の風景、人々のいとなみなどを中心に充実していきたいと思っています。 ご高覧ください。アドレスは下記のとおりです。

伊那谷・四季折々の小さな風景

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~kei-kei/>

○5/15 原田からコメント：

伊那谷の四季、みんな見ました。桜のほかこれからは夏の雲も良いですね。文章だけではつまらない。風景は和ませてくれますね。これからも楽しみにしています。

=====

●5/15 すずき産地さんから：109号推薦本の注文

○5/15 原田からコメント：『誰でも打てる十割そば』の注文を農文協の「田舎の本屋さん」に頂きまして有り難うございました。

『誰でも打てる十割そば』

<http://www.ruralnet.or.jp/books/2002/54002190.htm>

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=02058608>

<http://rural-2.ruralnet.or.jp/cgi-bin/isbn.cgi?isbn=ISBN4-540-02190-7>

=====

●5/15 丹羽さんから、

109号の配信有り難うございました。原田さんのクラス会の話、大正生まれの者が集まると話題は健康のこと、持病のことばかり、いずれも同じだと微笑ましくなりました。

今回も私あてに送って下さった戦争体験記の中からの紹介です。冊子の題名は『比島兵站を支えた影の力』、筆者は千葉県松戸市在住の仲村敬二さん（92歳）、比島派遣第14方面軍野戦貨物廠第2開拓勤務隊に所属、昭和19年12月頃からルソン島で、米軍に制圧されて山岳地帯に散開した日本軍戦闘部隊に対する食糧補給という困難な任務に着かれ、自らの部隊も食料難に喘ぎ敵ゲリラの攻撃に遭遇しながら、やっとバタンガス捕虜収容所に収容されて21年12月に復員された方です。作戦行動中の過酷な体験記録を紹介するスペース

はありませんので、収容所の機関誌に掲載された短歌の一部を紹介させていただきます。

「敵来りなば果てよと兵器渡して病の戦友と口早に別る」「突撃に斃れるはよ
けれ夷狄等の爆弾にはまだし果てるべからず」「死ぬ手段なければ吾に手榴弾
給えと病の兵は這い寄りぬ」「ゆきゆくは果つる命なり今日の日を保たんゆえ
に木の実をひろう」「背に重き米を担えば泥濘に兵はまるびてしばしは立た
ず」「掘り返し掘り返し細き芋をあつめて煮るが今宵も又つづくなり」「水筒
の水を注げばごくごく死水のみて戦友は息絶ゆ」

○5/15 原田からコメント：昔兵士として中国に侵略したことを今でも悔やんで
いる同世代の友人から、「戦争体験のコーナーはいつもたいへん興味深く読
んでいます。これからも続けてください」とコメントを貰いました。

○5/15 原田から紀平さんへ：15日の生活欄拝見しました。・・
紀平 重成さま

ご無沙汰しています。五味記者のことでお忙しいと思っておりましたが、
生活欄のおばあちゃん劇団「ほのお」代表大石さきさんの記事拝見して、安心
しました。

高齢者の生き方として素晴らしいことです。

東京でももっとあっていいと思いました。

最近先輩の病気や死亡が続いていますのでなおさらです。

近藤康男先生は、自宅でお元気です。通勤は無理になりましたが。

私は変わらず月・水・金は通勤しています。

では、また。お元気に。

●5/16 紀平さんから、返信

原田 勉さま

いつも「電子耕」の最初の方に拙稿コラム「銀幕閑話」の“CM”を
入れてくださりありがとうございます。お蔭様で最近はずいぶん反響が
伝わってきて、「読んでます」という知人の声や「韓国映画の上映に
関わっているのだから取材してほしい」「監督が来日するのでインタビューを」と
いう業界の声なども寄せられ始めました。
継続は力なりということでしょうか。

劇団「ほのお」の大石さきさんは87歳とは思えないお元気で藤枝から静岡までわざわざ出てきてくださり、駅前の映画館事務室でインタビューを行いました。新聞では顔写真でしたが毎日インタラクティブの女性サイト「カモミール」の中の「Women's News」の

「Pick Up」コーナー

<http://www.mainichi.co.jp/women/news/p200305-06/0515.html>

では映画館前に立つ大石さんの様子がカラーで写っています。元気だけでなく、とてもチャーミングで魅力的な方です。

近藤先生は自宅でお元気とのこと。安心しました。

どんな日課なのか想像しています。やはり全身摩擦の健康法は続けているだろうな、もしかしたら畑にも立っているのだろうか……などと。

紀平

=====

●5/17 丹羽さんから、原田さんの「クラス会の話」に一句献上
大正年代の者が集まれば話の定番は持病のこと。糖尿病、前立腺肥大、高脂血症、白内障などなど、何か一つ以上の病気を持っていて、それが話題の中心となり、宴会も大いに盛り上がるのが誠におかしい。しかし、中には老人病とは無縁という異端者？もいるが、そういう者は話の輪に入れず孤立している。

そこで川柳を一句 『息災が肩身の狭いクラス会』。

○5/17 原田からコメント：

メール有り難うございました。

それはそれで幸福というもの。

=====

○5/17 類農園さんからメルマガが送られてきましたが、お茶の宣伝でしたので割愛します。5/21 松枝征太@化学工業日報社さんもホームページは農文協のルーラルネットリンク集に申し込んで下さい。

農文協のルーラルネットリンク集

<http://www.ruralnet.or.jp/links/links.html>

掲載希望申込方法

<http://www.ruralnet.or.jp/links/request.html>

○原田から文化座の田村さんへ

私のメルマガ「電子耕」に演劇情報をお願いします。なかなか情報がきません。今日、中山さんから貴方のホームページを聞いて、拝見しました。いろいろ情報がありますね。「電子耕」は1800人の読者があります。隔週刊ですがもう4年も続いています。

文化座のホームページももっとにぎやかにしたいですね。どんどん情報を送ってください。

忙しいそうですね。私の「電子耕」を送信します。

それを見ればどんな情報を求めているかわかります。暇な時みてください。貴方からメールを頂ければ申し込み代行します。

また、暇な時私のホームページのアドレスを下記に書いておきます。

みてください。

●5/18 文化座俳優の田村さんから、
原田さんこんにちは！田村です
掲示板のカキコを見ました。
電子耕を是非送って下さい。宜しくお願いします。

最近はADSLの調子が悪くて困っています。

NAME 田村智明

HN どっぐまん

サイト名 どっぐまんらんど

URL

<http://www8.ocn.ne.jp/~dogman/>

●5/19 レモングラスさんから：

原田様

多岐にわたった内容で、行動範囲の限られた主婦には視野が広がります。

が載っていましたが、わたしも最近、”ゲノム革命、我々はどこへむかうのか”という講演を聴き、シドニー・ブレナー博士、というノーベル賞受賞科学者の話に考えさせられました。多くの消費者が遺伝子組み換え食物に対して不安をもっています。しかし、世界の人口が今60億、50年後には90億近くなることを考えると、現実問題として、GMOを利用しないと、世界的にみて食糧供給は不可能なことは目に見えています。もちろん、人口増加を抑えることが必要だと思います。しかしそう簡単には解決できません。飢餓に陥るか、GMOを食すかの選択をせまられたら、人道的に考えてGMOを利用しなければならないでしょう。ゲノム革命は食糧・医療分野に多くの恩恵ももたらすでしょうが、博士は”一部の金持ちだけでなく、全世界の役にたつように考えねばならない”とおっしゃっていたのが、印象に残りました。もちろん、安全性が保障されることが一番大切ですが、日本だけでなく、もっとグローバルな視点を忘れないようにしたいです。

情報の開示、倫理性の検討は必要ですが、どうも研究者がいばっているような雰囲気を感じるのは偏見でしょうか。どうしたら、多くの人が今後のすすむ方向づけの討議に参加できるのでしょうか？

○原田からコメント：イラク農業を考えてみたら、石油代金でなぜ国内の食料自給をしないか？と思いました。それでは日本はというと、食料輸入大国になっていて安全な国内食料をないがしろにして農業を壊滅させようとしています。もっと足元から生活を変える意見をあらゆる機会に主張するべきではないでしょうか。

●5/19 鈴木Mさんから：家庭から排出する野菜くずについて

このたび先生の著書を図書館から借り受け、勉強させていただくことになりました。

よろしく願いいたします。

ところで私は、毎日排出する家庭野菜屑などのざんさいを肥料化して資源化することに興味を抱いております。

先生が、既に研究されて発表されていること推察しておりますが如何でしょうか、

山形県長井市で試みられているレインボープランも有名ですが、

わが多摩ニュータウンでは、この事業がまだ試みてないので、参考になる資料などあればご教示下されば幸いです。

○原田からコメント：大型の堆肥センターの例を含めて「堆肥つくりの実際」が書いてある本を紹介します。最新刊の藤原俊六郎著『堆肥の作り方・使い方』農文協刊1500円です。地元の本屋さんか図書館に請求してみてください。

ネットでの紹介&販売は、

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=03017537>

<http://rural-2.ruralnet.or.jp/cgi-bin/isbn.cgi?isbn=ISBN4-540-02138-9>

まで。

●5/20 安澤さんから：「国際ブックフェア」の一日に感謝！

暫くの間マシーンから離れていましたが、誌面を開けば皆様方の「声」に読者層の厚さと、隅々までの読み応えに読者の一員として嬉しくさえなりました。

実は 私宅のマシンの具合が悪くしばらくの間接続不可で、今までのメールも届かない有様で 今やっと何とか通じるかどうか・・・

(ADSL にするつもりです)

遅ればせながらのご報告ですが、 4/27 に友人と「国際ブックフェア」に行きました。

目指す「図書」を手にして次に「農文協」のコーナーで稲の育て方を教えて頂きました。

健康食品の「図書」などを求めて頂いたお米はさすがおいしく、満足の一日に感謝しています。

○原田からコメント：有り難うございました。農文協に代わってお礼を申し上げます。

●5/25 森さんから：

原田勉様

お加減はいかが。次回稿です。よろしく。

○原田から：相次ぐ先輩・友人の訃報に心ゆさぶれていました。しかし、それでも生きてゆかねばと思って居るところに原稿を貰いました。「どうしてこんな見事な男女関係が成り立ったのか」と宮城さんの本を読む気になりました。

<舌耕のネタ> 「ニッポンの食料輸入とその危険性」

中国広東省から発生した新型肺炎：SARSのウイルスの感染源はハクビシンやタヌキではないかと言われている。食は広州にあり、というほど広東の料理は珍しい食材を使っている。その珍しい食べ物から恐ろしいウイルスが伝染して香港から世界各地に広がった。民族や地域にはそれぞれ独自の食文化があるのは良いことだが、経済状態や国際交流が盛んになるとその地域だけですまない悪いことも起きてくる。

現在の感染症の世界的流行の原因は未開地の開発と交通の発達によって大きな問題になった。中国の場合も沿岸地域の経済成長に集まる労働者は未開地の農村から出稼ぎにきた人が多い。それも航空機による人口移動が急激に増えた。それと共に付随して病気も移動している。こうした変化は中国に限らない。日本もそれらの変化による被害を避けることはできない。

日本では今のところ発生していないが秋口になって風邪が流行するころ、もう一度SARSが流行する危険性もあるのではないか。

SARSとは違うが、日本の食の安全性ももう一度考え直す必要がある。危険な食物の質と量は違うが、たとえばハンバーガー、ポテトチップ、トウモロコシ、小麦などの輸入食料が問題である。

ハンバーガーに使われている牛肉は、アメリカの牛でホルモン剤を与えるので20カ月で出荷される。育ちが早く脂肪がついて肉が軟らかい。しかし、ホルモン剤「エストラジオール」は発ガン性があるとEUでは輸入禁止されているが日本では規制されていない。

ポテトチップはアメリカのジャガイモが原料で、発芽抑制剤「クロルプロファム」を収穫後処理して船便で日本にくる。これも発ガン性を指摘されている。輸入小麦も虫食いを防ぐ「マラチオン」という殺虫剤が用いられている。これは神経に影響を与え催奇形性が指摘されている。

さらに、遺伝子組み換え食品がある。飼料用トウモロコシのスターリンク種である。害虫に有効な毒物を組み込んである。これが牛、ニワトリ、豚の餌になっている。遺伝子組み換え食品は大豆にも除草剤耐性が組み込まれている。

以上のことは、前から言われているがその根源は日本が食料輸入大国になっているからである。中国のSARS流行の脅威を他山の石として、食料は国内自給体制を強化し、「日本の食文化」を尊重する食生活にたちかえること。それには私たち自身の生活から改める必要があると思う。

詳しくは下記の資料を参考に読んで頂きたい。

(参考資料：文芸春秋6月号「食料植民地ニッポンの危険な食物」青沼陽一郎)

<http://www.bunshun.co.jp/honshi/honshi.htm>

<農工大日中友好会情報>中国研究会(畜産・酪農)のお知らせ

2003年(今年度の事業)

本年度の事業として、1月の総会で第10回中国同窓会に参加することを提案・意見を集め検討しましたが、先月から新型肺炎(SARS)発生のため中国側とも調整しましたが、現状では訪中の見通しがつかなくなりました。

そこで、事務局としては、やむなく計画の一部を変更し次のように行うことを決定しました。

1. 中国農業問題の研究会の開催

東京農工大学農学部国際交流委員会との共催事業として、下記の研究会を開催する。

日時：平成15年7月12日(土)午後2時～4時15分

場所：東京農工大学農学部 新2号館 多目的講義室

テーマと講師

(1) 中国の畜産・酪農の現状と将来(講演)

千葉県農業共済連 岩瀬慎司(千葉県夷隅地区家畜診療所所長、獣医学科47年卒)

2000年3月から酪農技術交流訪中団に参加し、10回にわたる河北省・北京市と交流を続けてきた経験と業績を報告し、今後の中国酪農の展望を語る

(2) WTO加盟後の中国東北部の畑作と畜産―黒龍江省の畜産戦略(報告)

学術振興会外国人特別研究員 周 晓明(東北農業大学客員教授)

主要な食糧穀物であるトウモロコシ過剰が予測される中で、牛乳乳製品の需要の伸びに対応した乳牛の急激な飼養頭数拡大が図られている。そのホットな情報を紹介する。

なお、研究会のあと懇親会をもちます。(午後4時30分～6時30分、中国留学生・在学生歓迎)

2, 第10回中国同窓会への参加と交流の旅の変更について

平成15年中国農業大学（北京）で行われる中国同窓会に参加する予定で、中国農業大学張鉄中教授と下田会長が日程の調整をしていましたが、中国・北京の状況が予測出来ないので、日程その他について現状では対応出来ないとのことです。

4月29日の中国温家宝首相の発表によると「新型肺炎の流行は長期化する予測である」という。

そこで、第10回訪中記念事業の計画については一時保留と致したいと思いません。

（農工大日中友好会のホームページを更新）

<http://jc-yuko.gr.jp/>

2002年第9回の訪中写真記録

<http://jc-yuko.gr.jp/pct9/page0001.htm>

<丹羽敏明の戦争体験> 10、コックリさん占い

5/15

食事当番の二人がある日草を抱えて戻ってきた。「牛が道端の草をうまそうに食ってるんで、牛が食えるものなら人間だって食えるんじゃないかと思って刈り取ってきた」と言って水洗いをし、適当の長さに切った草を、湯を沸騰させたバケツに入れ、あく抜きしてバケツから取り出した。「この際、贅沢は言えねえからな」と皆で試食してみたが、どうにも繊維が強くて飲み込めない。

「もう少し煮立てたらどうだろう」と再び煮沸してみたが、やはり駄目だった。私は気がついた。「おい、牛は胃袋が四つあるんだ。だから繊維が強くて消化できるんだよ。胃袋が一つしかない人間には無理だな」と草を食用にすることは諦めた。

またある日、今度は見事なヤツガシラを茎ごとぶら下げて帰ってきた。「畑じゃないところに生えていたので掘ってきた」という。見たところ茎も内地で見る里芋の茎と変わりはない。「大丈夫みたいだな」とヤツガシラを洗い普通に切って煮立てたやつを一口二口食べて飲み込んだ。そのとたん、食べた者みんなが口を開けて「ああ」と言ったきり涎を垂らしたままの状態となった。のどがエグくて口を閉めていられない。その日は1日口を開けたまま、翌日も普通の食事はのどを通らなかった。あとで現地人に聞いたら「この辺の野生の

芋を食ったら牛でもイチコロだよ」と言った。飢えた身には何でも食べ物に見えてしまうが、野草に関する知識のないままに試すことの危険を自覚させられた。

キャンプの中の一隅に夜遅くまで灯火がついているところがあったので、近寄ってみた。「何をしてるんですか」「コックリさんだよ」「コックリさんてなんですか」「一種の占いだな、日本からお狐さんと呼んで内地へ帰れる日を占ってもらうのさ」と説明された。日本から狐を呼ぶなんてことが出来るのかと私はいぶかったが、それが出来るというのだ。見せてもらうことにした。車座の真ん中に何やら書いた紙が置いてある。中央真上に鳥居の絵が書いてあり、その下に五十音の平仮名が書いてある。術者が手に持った箸で鳥居を指し、その手の上に他の者が手を載せて問答が始まる。「コックリさん、コックリさん、いらっしやいましたら質問に答えて下さい」で箸を持った手が左に動けば「はい」である。術者の手は自然に動くのだそうだ。その手に添えている他の者の手も一緒に動くが、無理に動かしているのではないと言う。「自分たちは内地へいつ帰れるでしょうか」と聞く。「今年中」とか「来年夏ごろ」とか、箸を持った手が平仮名を指して答える。お狐さんは、例えば豊川稲荷とか伏見稲荷とか、呼べばどこからでも来てくれるそうだが、簡単には来てくれないので心をこめて何度も呼ぶのだそうだ。だから術者は汗をかきながらやっている。かなり疲れるらしい。こういう占いができるのは謂わば特殊技能者なので、あっちこっちの部隊からお呼びがかかるらしいが、お狐さんの答えを信じる者は多いようだ。何時帰れるか分からない不安感の中でコックリさんのお告げは唯一信じられる啓示として私たちの心を癒してくれた。

<日本たまご事情>食の安全性に無関心? 愛鶏園・斎藤富士雄

原田先輩

富山県の五箇山に山菜を食べに行ってきました。

そこには日本の食の原点があり、ついでに古民謡「こきりこ」に聞きほれてきました。

た。

斎藤 富士雄

<日本たまご事情>食の安全性に無関心?

先日、「彩の国スプリングフェスタ」に出かけた。

それは埼玉新都心（さいたま市）のけやき広場で開催され週末のため多くの人達で混雑していた。

”暮らしのとなりが産地です”のスローガンのもとに埼玉県農産物が出品され、それらは飛ぶように売れていた。

私どもの農場でも普通スーパーマーケットで売られていないジャンボ卵だけを売りに出した、生産者の顔が見えるように店先にパソコンをおき、卵パックに印刷されたホームページのアドレスを打ち込めば農場の様子、安全な卵を生産する仕組み、飼料の種類、鶏卵生産の基本的ポリシー等など、情報は沢山用意しておいた。隣のブースでは埼玉県産の牛肉についても、一頭ごとにその飼養履歴がわかる、いわゆる IT を駆使したトレーサビリティの仕組みを説明していた。

あれほど BSE 騒ぎがあり、食の安全性を問われたのに、消費者の人たちにはこの問題にいまいち関心がない、残念ながら卵についても同じであった。

「喉元過ぎれば熱さ忘れる」のせいかな、単なる無関心なのか、はたまた生産者の言う「安全性」をまるで信用してないのか、、、。

ただひとつ気が付いたことがある、この種のフェアでは従来農産物を安く売って人を集めていたが、どうも最近は様子が違う。

ここに出ている農産物は皆しっかりした値段で売られていたし、卵も決して安く売らなかった、それなのに売れるのである。

つまりそこには、それを作った親父さん、おかみさん達がいたからに違いない、本当の顔の見える関係である、こ難しい IT による説明よりもよっぽど力がある。これは農産物販売の原点であるに違いない。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

<森 清の読後感> 「女性と仕事3、人を愛し、仕事をするということ」

宮城まり子『淳之介さんのこと』文春文庫、2003年4月刊、638円+税
5/25

宮城まり子『淳之介さんのこと』文春文庫、2003年4月、638円+税（単行本は、

文芸春秋、2001年4月刊)

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=03017951>

「女性と仕事 (3) 人を愛し、仕事をするということ」

作家吉行淳之介は1954年に芥川賞を受賞、女優宮城まり子は1955年に「ガード下の靴磨き」でレコードデビューした。

その二人は、それぞれに仕事が認められ始めた頃の1957年に出会い、間もなく一日も会わないではいられなくなった。結果的に二人はそれから37年間、生活を共にした。

59年、宮城は半年間の予定でアメリカへ勉強に出かける。吉行と別れられるかと思っただけであるという。吉行がニューヨークの宮城に手紙を書いた。宮城は、メキシコからアメリカへ飛んだ飛行機が不時着した混乱の中で、吉行に「お守り下さい」「抱いていて下さい」とメモを書き、生還した後に吉行にそのメモを送る。

その後すぐに、フランスにいた宮城は弟の死に会う。吉行は「はやく君に会いたい」と書き送った。宮城は帰国。そして、同居。二人は互いに相手を必要としたようである。

出会った頃、吉行にはすでに妻がいた。妻は妊娠していた。女の子が生まれた。同居してしばらく、宮城は「奥さんと別れて」といい、夫人は「子どもを殺すわよ」という。「真ん中で男は、つらかるナ」とは本書の宮城の言葉である。

1964年、二人では初の外国旅行へ行く。アメリカから始まった旅は、フランスはパリで終着、宮城は吉行を置いて帰国する。その時、一千フランを渡した。「淳之介さんが、パリの娼婦とも逢わないなんて、おかしいわ」と宮城は言った。吉行は飛行場まで送ってきた。宮城は、「じゃあ」と言って歩き出したが戻ってしまった。吉行が抱きすくめてくれた。あわれとも、わびしいとも、悲しくともあった。男である人間の吉行を愛した宮城は、小説を書く吉行を支えることで自分を守ろうとしたのか。

すでに宮城は、身体に不自由を持つ子どもたちに教育を与えようという志をしばしば口にしていた。パリに吉行を残して一人帰った宮城は、その自分をこう書いている。「こんなに愛しているんだもの、彼を理解し、そして自分の仕事をきちんと持っている人、私は“女優”とそして肢体に不自由を持った子に教育をと願う一人の人」。

宮城は、その後、上野毛に新居を構えて吉行を迎えた。そして二人の関係と生活をこう考えた。「仕事を持っている二人。／仕事と生活を上手に、大切に暮らさなきゃって思った」。

ここには、自立して暮らすことで人を愛することを徹底しようと念ずる一人の女がいる。吉行が同じように思っていたかどうかはとりあえず横に置く。

しばらくして吉行の娘が家出して宮城たちの家に住むようになる。吉行は、にわかに家長の立場をとり、宮城もそう仕向ける。にわかに父と娘が話し合っている居間に入りかけて宮城は疎外感を感じ、惑う。しかしすでに宮城には「ねむの木学園」があった。人としての生活をしっかりと営める根拠地を持っていた。それで、自分を保てた。

やがて娘に結婚相手が決まると、結納に、結婚式にと宮城は継母の真似事をする。そうして宮城と吉行は、現代の普通の家族を演じる。しかし、結婚支度で宮城は着物類を、吉行は結婚式の費用と旅行費用をというように分け持つ。そのように二人は、金銭で独立関係を保つことを最低の共生条件にしていたようである。仕来りでは常識に、人としての関係では新しい男女関係を築いたといえようか。

吉行は病身の男であった。

1992年夏、宮城は吉行ががんに侵されていることを伝えられた。それからは献身の日々である。

1994年、吉行は宮城に看取られて亡くなる。宮城は、人に隠れて吉行の合掌させられた指をほどき、原稿執筆用の万年筆を握らせる。

人として愛し、小説家として愛し、小説家であり人である吉行を愛して送った宮城は、いま、ねむの木学園と、それに併設されている吉行淳之介文学館などを守って暮らしている。

私が見た数冊の、吉行の文庫本の著作権者は、「Mariko Honme」となっていた。本目真理子は宮城まり子の戸籍名である。吉行は死して宮城の事業を支えていると評せるか。

女と男、愛と仕事、その諸相を考えさせてくれる本だ。

知人に宮城と住み始めた頃の吉行にインタビューした人がいる。彼は、初め吉行の家に電話をした。すると、「吉行はここにはいないのよ」とさわやかにいって連絡先の電話番号を教えてくれた。その番号に電話をすると、「はあい、宮城です」という明るい声が聞こえてきた。彼はその頃、事情を知らなかった。

いま思うのは、さわやかな声の女性その後どうなったのかということだとう。
う。

(単行本は文芸春秋社、2001年4月刊)

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=01019843>

森 清

<http://homepage2.nifty.com/morikiyoshi/>

<104歳近藤康男エッセー>有馬頼寧(ありま よりやす)さんの思い出

有馬さんは旧久留米藩主の長男として東京・日本橋に生まれ、色々話題の豊富なひとで、私には小学生の頃からの思い出があります。

一九一四(大正三)年、大正天皇の即位式後の大嘗祭に用いる米を作る田(悠紀齋田)を担当していた愛知県六ツ美村に、天皇の名代として来られたのが有馬さんでした。当時小学校高等科二年生の私は学校の先生に率いられて矢作川の河原で、六ツ美村の入り口であった美矢井橋を渡る有馬特使をお迎えしたのであります。

私の父が村の収入役をしていたので、有馬さんについていろいろ聞いていました。有馬さんは、当時農商務省にいて大嘗祭の齋田に関する仕事を担当していた典議官だったということです。六ツ美村で当時使用された耕作従事者の衣類や器具、稲穂などの資料と写真は現在も岡崎市六ツ美民俗資料館に保存・展示され、今でも悠紀齋田お田植えまつりが行われています。

欧州大戦後、大正デモクラシーの洗礼を受けた有馬さんは水平運動のリーダー格となり、大正十年には同愛会の同士と共に、日比谷公園の草取りをして世の話題となったことがあります。有馬さんはこれについて、「自ら額に汗して得た金で同愛会の事業費を少しでも自ら生みださうという心からで、騒がれるほどのことではなかった」といっていました。

有馬さんは帝国大学農科大学の卒業生であると同時に、一九三一(昭和六)年ころには帝大農科大学付属の教員養成所助教授として農政学を担当していました。しかし、有馬さんは翌年後藤農相の下に農林次官となったため、退職しなければなりませんでした。その後を継いで農政学担当になったのが私です。

恐らく佐藤寛次先生の配慮であったと思いますが、そのとき私は東大助教授になりました。三五（昭和十）年には東京高等農林学校の教授になったが、東大の助教授はそのまま継続していました。

次に有馬さんが、一九三七（昭和十二）年に農林大臣になったとき私は農林省官房統計課長になって農林統計の改正を行う機会を与えられました。

私は学生時代に会得した土地台帳を利用した土地所有、農地価格などの統計を調査しました。その時、有馬農林大臣は何の制約もなく、気前よく許してくれたので自由に調査することができました。また、宮中で天皇に言上するために米の作付け面積や作柄、予想収量、実収高などを報告する大臣に随行する統計課長として大事な仕事は何度もありましたが、有馬さんのときには、私は控え室で待つだけですみました。

有馬さんは、一九四〇（昭和十五）年、戦時中の農山漁村文化協会の初代会長になれましたが、私は一九七九（昭和五十四）年に戦後改革された農文協の第六代の会長になりました。これは奇しき因縁ですが、農文協の性格は戦前の国策宣伝のための大政翼賛団体から戦後は農民の自主自立を求める文化運動団体に変わっていました。初代会長・有馬頼寧について私は『農文協五十年史』の農文協創設期の人々（二一ページ）に詳しく述べています。

戦後、落ちつきを取り戻した一九五三（昭和二八）年ころ、東京農工大学の
大谷省三教授と一緒に杉並区荻窪関根町の有馬さんを訪ねたことがありました。

当時の有馬さんは最後の財産である土地五百坪を利用して花づくりで生計を立てていました。私も五百坪の山林を開墾して農業をやっていたので雑談の中心は花づくりと農業のことであったように覚えています。

有馬さんは随筆を得意とし、そのころ出版した『花売爺』（全国農業出版）を頂いて今も私の文庫に保存されています。戦後財産を無くして五百坪の土地に花を作り自分達夫婦と娘が販売係りになって暮らしている話や戦争犯罪容疑者として巣鴨に収容されていた八ヶ月中の話。近衛文麿・木戸幸一・原田熊雄・石黒忠篤、巣鴨の同窓生など人を語るものを含んで興味尽きないものであります。

二〇〇三年五月二六日

『農文協五十年史』

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=90017367>

「104歳の農業経済学者 近藤康男の3世紀」

<http://nazuna.com/100sai/>

<農文協図書館サイト更新情報>

2003.5.17

新規収蔵図書

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html>

ニュース1 閲覧CD-ROMリニューアル

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/200305/news1.html>

ニュース2 図書館WEBページ別アクセスベスト30 (前年同時期比 2.26倍)

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/200305/news2.html>

近藤康男文庫目録その5

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/071kondoubunko1.html>

●「一般に流通していない農業書リスト」2003 完成 プレゼント！（継続中）

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/200303/news2.html>

◆「農文協図書目録2003」も完成しました。合わせてお申し込みください。

<私の近況報告> 5月15日～27日（104歳のエッセイが出来た）

5月14日、山崎農業研究所「耕」編集者・農林ジャーナリスト増井和夫さんの訃報が届いた。悪性リンパ腫で入院していた東大病院で12日に亡くなったという。一時小康を得て5月の連休には帰宅していたのに病院に帰ってから急変したという。私と同類の血液ガンだけに見舞いにも行って励ました仲で、若いジャーナリストとして期待していただけに残念である。

19日、近藤康男先生の思い出エッセイの原稿がくる「有馬頼寧さんの思い出」である。早速資料を補充してワープロ印刷して自宅に送り、23日にお伺いした。さらに追加の話聞き、第3稿を作成する。

26日、先生の校閲を得て決定稿が完成したので本誌に掲載する。

24日、クラスメートの肥沼徳五郎君の訃報を聞く。脳梗塞の再発で入浴中に

亡くなったという。4月15日松村夫人の告別式のときは久しぶりに元気な様子だったのに思わぬ急死で残念である。

次回、111号の締め切りは6月10日、発行は6月12日の予定です。

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名（見出し）を必ず書くこと。読みたくなる見出しを簡潔・明瞭に。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的にズバリと書き出す。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めの方に書く。
- 3、1回1テーマ、書き出し・本文・結論を10行位にまとめる。
- 4、送信する前に、何を言わんとするか、読み返し、推敲することが大切。
- 5、ホームページを持っている人は、文末にURLをつける。
- 6、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックをする。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。htmlメールもご遠慮ください。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：本体700円+税 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/10.html>

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「78歳が送る農業文化マガジン『電子耕』」 第110号

バックナンバー・購読申し込み/解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

2003.5.29（木）発行

西東京市・ひばりが丘 原田 勉

mailto:tom@nazuna.com

発行部数 1821 部 **ここまで『電子耕』*****

.

.